

# AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

旭川医科大学研究フォーラム (2017) 第17巻:81-83.

本学教室員執筆書籍の紹介 ナニコレ? 痛み×構造構成主義:痛みの原理と治療を哲学の力で解き明かす

阿部 泰之

## 本学教室員執筆書籍の紹介

# ナニコレ？ 痛み×構造構成主義： 痛みの原理と治療を哲学の力で解き明かす

阿 部 泰 之\*

医療や医学に哲学が必要だと思っている。ここでいう哲学とは「俺の診療哲学」のような個人的な理念を言っているのではない。多くの人が共通理解できる原理のことを指している。おそらく多くの人（特に医師は理系が多いだろうから）、哲学と聞けば、癖のある人たちが小難しい言葉を並べているものだとか、屁理屈をこねて議論を煙に巻くものだとかのイメージがあるかもしれない。何を隠そう私もそうだった。しかし、哲学の本を読み始めてみると、多くの気づきを得ることがわかり驚いた。それからは、容易に解決できないような問いにぶつかったときには、まず哲学の本に当たってみるようになった。

本書は、私が感じている哲学の有用性、いや、どちらかというと“楽しさ”を、とりわけ医療に関わる多くの人たちに知ってもらいたくて書いたものである。つまり、タイトルを見れば「痛み」の本のように見える（読んでもそう思うかもしれない）が、私の本当の目的は、「哲学している」ときの、なんとも言えない“ワクワク感”を同じように医療者諸兄にも味わってもらおうことなのである。本文にも登場させた哲学者の西研の言葉を再び借りることにしよう。

じぶんと同じようなことを悩み、問うている人がいることに気づくと、すごくうれしい。大切なことをともに考えあっているという感覚が得られるとき、ニヒリズムはどこかに飛んでいってしまう。（西 研（著）：哲学のモノサシ，NHK出版，1996より）

そうそう、こういう感覚を、本書を読むことによって感じたのであれば、元がとれていると思ってもらってよい。

今回、哲学の中でも「構造構成主義」というメタ理論を本書では使っている。構造構成主義というものの自体を知らない人がほとんどであろうから、その説明に全体の3割程度は使っているであろうか。なるべくわかりやすいように例示やメタファーを多く取り入れ、イラストを多用した。結果、現存最もわかりやすい構造構成主義の説明書になった。だから、本書は構造構成主義の入門書としても利用できるものである。

本書では構造構成主義を使って、医療や医学が孕んでいる根源的問題の解明を試みている。それは、人間を心と身体に分けて考える、いわゆる心身問題についてである。心と身体を分け、主として（機械論的）身体を診るようになって、医療や医学は格段に進歩した。医療・医学の進歩にとって、心身二元論は必要なものであったと言えるかもしれない。しかし、そのぶん失ったものもある。人間の持っている意味や価値の領域を扱えなくなったことである。少なくとも、「痛み」という現象を扱う場合、これはどうにもうまくな。そこで本書では、「構造」という概念を使うことによって、現代人に染み付いてしまった「心と身体を分ける」というものの見方を転換することに挑戦している。根本的な視点の切り替えを行ってから、「痛み」という現象を扱うことにしたわけである。このようなメ

\*旭川医科大学病院 緩和ケア診療部

タ視点を持たた人は、痛みに限らず、様々なモノを余裕のある目で見ることができるだろう。そういう意味では、本書は医療・医学の基礎教育の教科書としても使えるものになっている。



前置きがずいぶんと長くなった。本書の内容について紹介する。左(右?)の4コマ漫画をみてほしい。本書はこんな構成でできている。



古代ギリシャ以来(少なくとも2000年経っているということ)、身体が受け取った刺激と、それを認識する精神のつながりがどうなっているのかということ、哲学・思想の重要なテーマであった。それを考える際、最も身近な例として「痛み」が繰り返し使われてきた。デカルトやウイゲンシュタインも痛みについての思考を展開している。



現代においても、痛みは人が医療を求める一番の理由であり、神経科学や分子生物学にとどまらず、心理学や人類学に至るまで多くの研究がなされている。しかし、それらのどれも、痛みという現象の一部を言い当てているに過ぎない(=個別理論)。

それに満足できなかった私は、痛み全体をまるっと説明するような理論の構築を試みた。そのために、これまで研究してきた構造構成主義という道具が使えろと考えたわけだ。話の順番として、まず構造構成主義を説明する必要がある。中核原理である「現象」「志向相関性」「契機相関性」「構造」を解説したうえで、関連するいくつかの原理も紹介している。つまり、これから使う道具とその使い方を説明したということである。

さらには、発信者の志向を予め開示してから論をすすめるほうがフェアだろうという考えから、「志向相関的自己開示」という構造構成主義にとっても新たな方法を考案して提示している。

これらの準備をしたうえでやっと、本筋である新しい痛みの理論構築を行った。これを「構造構成的痛み論」という。中で、痛み定義のゴールドスタンダードである、国際疼痛学会の痛みの定義を批判的に見直すという暴挙も行った。様々な志向を紹介する部分では、具体的な臨床場面をイメージできるように工夫したため、臨床に出ている人にとっては読みやすくなっていると思う。

この新たな痛み論は、今のところ最も包括的かつメタな痛みの説明理論であるが、それでも道具であることには変わりはない。いくら良い道具があっても、結局は使いようであり、使い手の態度・姿勢が問われるということである。そこで、痛みに限らず、広く対人援助・ケアに携わる人に必要な態度・姿勢の原理として、「他者承認の原理」をレヴィナスの他者論などを引用しつつ展開した。

最終的に、構造構成的痛み論に基づいた特に慢性痛の治療について理論と具体的事例を記載しているが、上記の態度・姿勢を持ったうえで、使ってほしいと結んでいる。

まあ、ざっとこんな「構造」の本となっている。

本書を読むモチベーションは様々であろう。痛みの臨床や研究に今まさに携わっており、新しい知見として読みたい人、私のことを知っていて、「まあ、読んでやるか」と思っている人、自らも痛み悩まされており、救いを求めて読む人。きっかけ(契機)はどんなものでもよい。できればいずれの場合も、あまり肩肘張らずに読んでもらいたい。読み進めていく間に、自分がなんとなく考えていたことが、ハッキリと書かれていたら、そこで膝をポンと打ってもらいたい。膝を打った回数が本書の評価だと思っている。

学内の人は、大学の図書館に複数冊配架されているので、すぐに手に取ることができる。しかし、ひよっとすると線を引きながら読みたくなるかもしれないし、まあ、それとは関係なく、やはりぜひ買って読んでもらいたい。著者としての正直な「自己開示」である。

P a i n  
痛み × 構造構成主義  
S t r u c t u r a l C o n s t r u c t i v i s m

ナニコレ?

痛みの原理と治療を哲学の力で解き明かす

◎阿部泰之 著  
旭川医科大学病院  
緩和ケア診療部

出版 南江堂

予価(本体2800円+税)

「本気で痛みに対処しようと思うのならば、科学の進歩、新薬の登場を待っているだけではいけないのです。痛みというものなんなのか、どのように考えたらよいのか、根本から考え直す必要があるのです。」  
(本書1章より)



こんなの、  
これまでなかった!!

「痛み」を“哲学する”ことで  
痛みの考え方が変わる、明日からの診療が変わる

- 第1章 痛みをめぐる様々な問題
- 第2章 構造化に至る軌跡の提示としての自己開示
- 第3章 構造構成主義とは何か
- 第4章 構造構成的痛み論
- 第5章 痛みという構造理解のための切り口
- 第6章 治療論に入る前に  
—「他者承認の原理」を知る
- 第7章 原理を実践に活かす  
—構造構成的慢性痛症治療

必携

痛みにかかわる

すべての医療福祉者に贈る  
目からウロコの一冊!!!

6月上旬発売予定

第10回  
日本緩和医療薬学会  
会場において先行発売します!

※予定は変更となることがあります